羣書類從

卅六

内閣文庫
和書 類
一八六九〇 號
六六六 冊
二一五 函 三 八 架

内閣文庫
番號 和 18690
冊數 666 (44)
函號 215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

羣書類従巻第三十六　　檢校保己一集

帝王部八

六代勝事記 記者未考

昔は蓬壺の月にかゝやきし今は蓮臺の雲に
聖をとりをさめ世すて人倫の應保（二条）の聖代に生まれ
て三余の明時に流るゝ海川にかしかとも年號屢かはりや
くかゝふにさて六十餘廻の星霜をつきぬ朝儀頻り
あらたまりて七代帝王の位にはへす六条流れ時
もいとおさなくて位をゆつりき（高倉）安元の比より（後鳥羽）貞應のそ

日本政府圖書　昌平坂學問所　淺草文庫

我ハ我か國に此事ハ哀ら何くさまさまならはとな
かう見るし當を世し事を國をの人家とも阿弥陀
教令し狂歌を称る文を嫌ふ心あるものし後ハ世
事すへて何と置く文義あらく何すとさそ宜し當是
の紀かをおし名立の神者み小相と云あそ之事此
見す達さ熟らしく下りを書あ何め信心も検実
の義法小従ひて善悪二の界をさとり和漢の紀録
をはさへて治乱二の政をはらしむ擬へ我いさゝか先生
の遺失とかきし　とのつら後世の官学ともとも絶
む事有此あめにして見とするさ次世のためる民はる

にして見るとはせよ

高倉院天皇　安德天皇
隠岐院天皇　阿波院天皇
佐渡廢帝　當今

高倉院天皇ハ神武八十代の正統後白河院の二子 七十七
母儀建春門院 滋子 贈左府平時信女 故の八歳にして儲君となりて
八歳にしく帝位をつぎ給ひ廿一歳にして崩し給へり御
宇十二年徳政五方に偏詩書仁義の事すゝれ所道とお
さし理世安民のためを所あとハ政門より世上文武芸
雑術を抑しもとよりてうを皆た出物の大道とありけれハ

述給へり畢如此不礼帝運のしかる也
安徳天皇ハ高倉院の長子にて母儀建礼門院（徳子 入道大相国平朝臣清盛息女）なり
三歳にして旌門をうけ給ひて在位三ヶ年此ほと天
下みたりやうやく西海波に入給へり大相国ハ桓武の苗裔
刑部卿忠盛の男也去（後白河）保元元年左大臣頼長悪のむほ
ほことはかりめくらし狼戻の離をおこして天下をみたり
洛中ハ戎あやうかりしむ七月九日夜太上天皇（崇徳）（鳥羽院子後白河同母兄也）
その小城南の離宮ハ焼いて出給ひ洛東の旧院にいり
幸給へり是戦場を二所に定め軍陣を其中にむすふ
同十一日に至上（後白河院）官兵をもよほして西院を征せしむ

やひのもとゝいへるにそむへてまうけをあらはし川流矣の
ところ左府命をうしなへり同廿三日太上天皇ハ讃岐
国へうつし奉る其餘党戎ハ刑官に仰せられてめしとり
或ハ出仕を停止して洛東明法博士をして所当の罪名
を勘申せしめらく右近衛大将（兼長）以下十二人をハ遠流
し合戦のともから散位平長員以下廿人をハ古法をかん
かへて首をきらしむ時に大相国（清盛）并義朝ハ法性寺殿（忠通）の教命
に帰して勲功をきはめく殊賞をかうふりて左申り
廷尉為義をハ男義朝梟首せしむ但後勅宣也（二条）後永暦
元年に右衛門督信頼にくみしたる故義朝将臣誅せられ亡ぬ

誅殺とおもひ又大将を是非追討して信頼義朝を誅
戮し伴類と配流せしむる源氏追罰して平家繁昌
きはめ頼政ひとりはからひて朝章をみだして万方法をさうへて
私の氏をおこなやまた後白河院安元年中に大納言成
親卿西光入道等におほせて謀叛をくはだてしかけれども
多田の源蔵人のゆゑめ中言国とかくむけくはしく密告
仁地下小細相ごとく悉皆至化すへてを残さるよりこれ
法皇の叡心居をとらし次
治承四年四月廿二日三位よりて世を経ひて同五月廿六日より
入道源三位頼政にて命以仁王子後援して自ら都よ攻落

の事はり頼政仁郎従伊豆国武士並渡辺の住人らに
て宇治橋を引て平家に抗して立居すむ所に数千騎の兵士
追討使一の流を佐して而るにひたすらに平法
家の風とあふひとそて鎌倉をうせしむとものへと無路をとりあて
多無頼政同子息家人ら法ねに討たれ年閏六月
二日摂州の福原に遷都あり而天台の衆徒道理ととを
て再三訴申によりて同十一月廿六日平安城に還御あり
同十二月廿六日南都の大衆蜂起するゆへ又三位中将重
衡を大将として東大寺興福寺を焼はらひとしめ
養和元年 辛丑

伊豆国の流人前右兵衛佐源頼朝ハ清和の後胤
左馬頭義朝の男也甲斐信濃両国の源氏等をかた
らひて謀叛をたくむ事に大庭の三郎平景親の忠を致す
る心ざしにて石橋の山にせめ寄せける佐々木四郎
忠ハ下命と共に海上に出かねて佐の御迎にまいり
の次郎一人をぐして船艜にのりて安房国をさして
こぎ行に三浦の浦の住人等が佐をむかへけるに畠山
庄司次郎稲木三郎等が大庭の三郎にくみしてゆ
くすゑの跡をおひて来りしかバ鉄に取さきまゐら
あるいは庄司二郎等重目によりて壮士をとゝのへ

ず船中にして佐の渡海にあひぬ数の義によりてよろしく
かゝる事ともとかけさて上総権守によりて下総国
をめぐりて相模国鎌倉のあたりにつきぬる其ハ実東海伏
せらる實源氏三郎先生義野心をさしはさむに佐の合
戦かゝりの冠者八田の四郎武者浚守小山の四郎
なつて下野国鎌毛の里の辺に征戦しぬへき事あまて
暴風東西よりおこりて庚塵成ぬるに
霧氏いかゝの為にいふとも紀ノ人馬眼路をとつし居
将へよりとゝ小さき縁の勞とありて数万の主とかる
あしたの志れ偏に天力と何事なる也昔周武王殷紂と

討しはかりに名をかへて富路事と云る丈にあらぬ
事ぬ五章二馬に蕃人門のかに来て主となすけらく
讃えとら川魚しとかひてさりぬ源氏に率る兵ありとな
し海外の天兵従として来るなりとあらぬしらる
討事とかすの文漢高祖韓信のくさふ如に海道
あやかりなる天儀に属すなりこれをかりて高祖
の子事をかきのとなりてこれ法術をあらなす古
今是国をもたれ入道太政大臣薨ぬ平家嫡子小松内府
のさりてよりて薨逝し世まへ宗相の名誉被押し平家
ふて武将の名器をうしなへ時に依平家伸行

家の下輩勢と起して一族の公相内大臣宗盛按察
使大納言頼盛中納言教盛中納言知盛参議経盛右衛
門督清宗三位中将重衡三位中将維盛従三位通盛三
位中将資盛正三位都盧十人同心連署して山王
有り祈請して天台宗に和与するの約をむすぶ叡岳は桓（五十代）
武天皇の御宇に伝教大師国家を守らん為に道場をひ
らきしより仏法さかりにして王城を鎮護と定
東国の源氏党類むすび難をなして公と押領し
出貢をも押妨なり当時弓馬の藝誉にて累代勲功
の家をつたへたる事をもする仏法の名をけがにあらず又

かくて此後のか川ふのる代志ろめし川らく　たまふ最
祖をおもへハよろしく本教の鎮為とさひつへし自今以
後も藤氏の春日社を氏神とし興福寺を氏寺とせる
かことくに平安ハ日吉社を氏神とし延暦寺を氏寺
として山門のよろこひを一門のよろこひとし社家の
ことハ我すきをとつくるハなきとせん故にくハ七社并
神明擁護をあつく述へ給ひけれハ三塔の衆徒合力して
めでたき事のたうしなきうちもあさけあるもたのもしき
我ぎもにけ事ときく人後とあはれすきの一事あし
無果さハまりて宿運つきぬる道ハ佛神冥助もなき事

給ひしを保元の昔にハ寿永の秋法皇をおもひて八条
の蓬壺を東の蓬府暴風をとあきを煙雲の浪花
もけむし龍の鷁首と海中にうかへて波上の行宮志川
かなるをあはしいそへのつらしれ紅ハ袖の涙よりさくう
とうきひさ月の三夜の志つくハ君傍ちと我のきしれそあ
娘ふあや海の身を数さ浪うし浪のかかれ見む人あ
志川ミ雲と猶かへあふあし我その玉躰ま影をおやうこ
渺茫ふとつく千尋のあまハ暁のうらみとへ雨つへり
切るかちの声ハ夜雨中心をくるし白鷺の声を松すむ
進める代ぞ今あもえひすけことなひかえりしあ中

三韓の遠海にわたるといふとも是をほかにあらそふ事なく
如し都を後にしてより風塵をさへぎりて撃突紅粉の粧
やうやくかざりを後へ善波眼をうばひて昔古郷の風を
しのぶべし

位をおりし給ひてのちはことに神に祈り修行の功を
千時後白河法皇は他の鵝鳥をもて仏前にまゐらせし勅使と臣
下のそのかみの給ひし西海の遠路はるかに行くとぞ
東都安全をいのらせ叡感のあまりに崇(?)徳院
の御すゑ且は将軍に仰られ且は撫民の為にも
競前の国豊後の宗廟に寄進せられぬ神領

威光をたのみ都鄙年月を経て後の勝負
後鳥羽隠岐院天皇は高倉院第三子御母七条院殖子後の坊門信清女也安徳
の後を継がせ給ひて二年に即位ありて御年四歳にして
位につかせ給ふ御寿命十九年藝能二ををさめ給ふ
中にも文章は殊にすぐれて弓馬にも長じ給へり国の政
務をば臣下に任せて武をこのみ給ふに常に遊覧の
事をのみ好ませ給ひて年々は彼是細工をこのまし
かくて天下に威をふるひ給ふ事かく楚王細腰をこのみし
ためしにならひて忠功の者をあまねくしりぞけられ
ければ世の中もしづかならず上の好む所下必ずさかんなり

程へに国のあやうかりし事ども多かりし故也 同七月廿八日
より義仲ゆるしに花洛へいりてまつ左馬頭に任
し伊予守を兼ねて朝敵追討のさたをうけたまはれ
ともさらに旅人賊亡の旅をなしすへからく関東の兵
軍をむかへしかともいとゝ花の都無よりいて法皇
数万の兵をもめしして法住寺殿にたてこもりたまへる
を同十一月十九日に義仲よせて小子館の勢をとらへ
けらて仙洞をおしこめ奉り卿以下数多の大臣まつりや
あまさへ威勢をほこりて職をさつけ始権者の
師にはらく二条の服を於て下居位の命とあへ

こと数千人也 首をとりて院につき血をながして河と
なる また宝殿の擁護をあやまち収蔵の宝物をうはひ
おほよそや義仲法皇を五条院にうつしまつり
て師従をとらへ門戸をまもらす
元暦元年 甲辰四月改元
依之此事をきゝて鎌倉の範頼義経并山本の源氏等
を将として正月廿日に義仲を誅伐し同二月七日摂津
の国一の谷をせめおとして数千の平氏を誅戮し平将
三位中将重衡をいけとりて東関にうつし南都に
わたして首をきらしむ 先年東大寺をやきしゆへなり

し給ひ建立ありしかは伽藍に施入し重衡の焼失
金銅坐大佛はおほいなるてかうを御手ゝからぬられ
すゝしく御身に和せ候とぞ
のありさまし桐の箸や伝らん人の世を経く鏡の宝に

文治二年 丙午

三月廿日男子の力つかれたく門司にまゐりや婦を無
入道大相国の後室二尊の居天子にてうしなひて九重
の浪の底にいまそかり名将八子方此の手接にあひ遠國無
旨女は東の手にまうてかく旧里女帰まで内府の生虜
きさかひきれ宮にいりて江川のあはれなるそ首を

京にかへる
さりしかや花の都をおもひしより志賀の浦風吹よせ気
征夷大将軍に佐殿（頼朝）西海の白波をたゝかひ奥州の緑林
をはらひして後錦のはた海賊をたいらけ入洛貴門亜相を
兼て羽林大将軍に任せらる拝賀の儀式希代の壮観
也行法をおもく正法をつきて一族の栄をさかめ萬人
の熊をあらため民の愁をのぞきむけ恩沢をのへす
すゑあへて叡感をうけ天下をおさめて候

建久三年 壬子

三月十三日法皇（後白河）崩 御年六十六 二ヶ年高運君也御賀ハ御

巻三 卅六

遂脩高野清浄也山勝地名所叡覧ありとさいわゐ験佛
霊社残る所なくめぐらし給ひ中にも大乗戒をうけ給ひて
崇敬をくはへ東大寺は聖武皇帝の跡をとゞめて金
銅の霊像は御手ずから開眼し給ひ叡信ふかゝりし
事なれば風の前の灯なる朝家の衰へたるを名残も
うらうらと消かしめでたき御陵の秋の露も新たなるをとふ
して無常の春風花の散るさまをさとり給ひ往生極楽の
期なりければ御のちのさかりそれは沙汰無みまし瑜伽振
鈴の声花の香に夜をとゞまり一乗読誦の声をも天に
暁をいかゞし雲となりけらし率去露盡てし

草木愁ある色あるはいふもさらなり霸陵の松はおのつからしも
鳥雀哀しむ声あるはいはんや洞庭の鶴ふれてなを
故なき人は孫子深しけれどとゞまりて御別をま
門に悲み河蒼の家ありあらん人を兼遊の恵一天の下
をもらさず平等の仁四海のすみにあまねく及
　風の前の御世をもしらざりし入けり月の出の盛を
同九年戊午
正月十三日将軍前右大将豊長を左京の将軍家郷虎
牙職とはとて狼戻をしほしいまゝ百姓帝沖の露にま長
して武器武家の先をよこしまに暴虐と武壮士何のまゝ

執権職を振ひて傍若無人の気任せに比企の判官
能員以下数百人の違背によりて家門一族を滅
し漸ふ向して叔父なるの禅師を殺害し国家に
とりりすくれて人のおけきたらんとせずして變病
をうけて終入の日　出家　外祖父をはゆる時政ならずと
おゝして能員が(?)以下金吾禅門の嫡子一万君
被搦の軍と有て禅門金吾(?)を挙して将軍の
宣旨を申成て禅門を深山に幽閉せり
土御門
阿波院天皇ハ隠岐院第一の御子御母承明門院 在子 内大臣通親公の女なり
建久九年戊午二月二日受禅して位につき給へり

土佐に遷のあひだ天地変異多くして時々をあやにく
をうち国中の海民ゆかしき遊女どもに至りて成果
あるにおいて万方拯育とすまうかせひ文道に竄女の子
さかりくして四海の清潤をいはひ給ふ今上は
の遁のあまくさはあめふる筆の萬洞の
風秋冷しく深山の月影さびしからまし
建仁元年　辛酉
正月廿三日夜二條殿小朝覲の行幸ありて時越後城
四郎平長用が家子小山朝政ら宿所に乱入して
次に仙洞に難く事更と逆討せんとしける宣旨

ありし勅許なくして逐電の後調伏して被誅
戮畢
同三年 癸亥
九月七日実朝を征夷将軍に任じ被叙従五位下 天
台の学生と衆徒と合戦の事ありて十月十五日に官
兵をつかはしてせめらるる壮士三百人計被斬同年
七日に堂衆追落 将軍実朝内大臣信清の娘を聘
して後遠江守時政計略ありてけしめに伊豆堂を謀殺し
次に広元伊予守平賀への道をさらて大慈寺作源朝
雅を将軍とすべきよし風聞ありて相模守義時朝
臣 大膳大夫広元朝臣将軍とせられ無異に逢
して七月廿六日に朝雅を討畢
建永元年 丙寅
三月七日摂政太政大臣 良経 頓死後京極と申す也 文採
人にすぐれ理政民をなでて深きことを存して深流とも
いう万機を補佐して執政なりき
　花開昔花開有露宅 新旧宅腐壊人
金谷の花のちりし南楼の月を神をとりて[illegible]
すて[illegible]人[illegible]
[illegible]秋[illegible]年と記して

かくうらみどもいひとりて侍しかるにや前大僧正慈鎮和尚の
よりつき道なりとて一日を二百首ようちなかやうにみせよとなん
いひつかはしけるもよみてたびぬれば佐みつかはされ
をりくさびさびてさえなうぬつし職事辨官も在まくら
く文章詩苑にあそばしてまつりとかさくらして
秋のよの風と月とのなかはみなかみのふるさとの道にひあか
とよみ給ひければ　太上天皇
うれ夜のうちやがて我ともろともに無つき神の名とみをや
二明六通の羅漢も不免幻術変化の修行者も無道を
ちあれとも有為無常のすかしさをつてすまされて捨て

侍りし
佐渡廃帝（順徳）ハ順徳院第二子御母修明門院（贈左大臣範季女）なり
四歳にして立坊十四にして位に即給ふ事十一年建保元
年五月二日将軍家臣和田左衛門尉義盛叛逆を起し
て逆人の館より出合戦いくさの庭に出死
するもの人もあまたぞ被さる同八月三日鬱山
在院三百餘人清水の領へとおもむきて長承にあり
たちかへるに其ためのことを行ひけるに十餘人と数
寛し世餘人我ら左福寺同十月北白河法師安
二人ちかきらの事なるにあらて出るの後の末

すゐ程の自結發向して姫路を攻燒んとする
り官軍とつハりてよく防きたりしかハ同十月廿日宮
治らり也候了
承久元年己卯
同月廿七日将軍家右大臣左大将源實朝右府
内々ハ云元氏の先実となりしかハ實朝公の官職
をよろ擁位せらるゝのミならす書き給ひけるに公暁
禅師ハ其兄の跡を継て一天風やはらかに
四海波静かなれハ天下時節にかなひて源氏の世
もハなほ月の嵐のすさましく吹くさはく道險なりし

をすゝめ奢なりしをにくみけるにや世をすてしまゝの
うち人遂に海をわたりにけれハそのうちもかしくあはれ
もつはらに従兵衛の庭にありてそ源頼朝の氏おもく
将の遺綱ハ三浦平郎おもてに従ふる職なる實朝にあ
らされハさらにしらるゝとこそハかりけれとも君に
右府ハいらせたまふ八幡の宮の社にて禅師をまちうけ
然るにして牛車にめされ月卿雲客のならひ
松山の下にありける公暁にしてうちとりまゐらせし
續羽林の職をうけて御所にさきにいたりて
見とりてうちにけるかな職位の方にまゐりけれ

春秋おそろしく八省帝王のたゆみなきをも枕にして楽嬉の後
其聲律とはいひて源氏の前より帝範の縷けりて至
人をも恨ていかなる人もつゐにはかなくて浅ましき風のまへ
にさらぬ身ともなるものを故左衛門督源仲章関東武
蹤を慕ふ也されば卑にして窮くしてなほ冠を得し袍を
ぬきて田園をあるへおもひたち社壇にまいりて是
惟によろこぶ由信の名をけがして次将の兼官に進み
とぬるゆゑならでは右府の足の経のつの遺孤とはいへども
家顧護して若気の別当に補して後一千首の和歌
丹府肝膽をくだきて玉柳の色をあらためて宝の宿

運のきはまりたるとおぼゆることに又もおもひしらぬ武
勇の家なる事のあさましく侍るに故に披露云〃ぬ
とし見風流死生の徹に行々古由名ある所にい
ふ信しく哀くさまに将軍錦なにおほえ給にけるなし
さらにかく事多き事なれども雄詞とつき給へる
祖宗の恩しかもと也普賢院主と共にゆかしき白卑の
みはあらぬ老父のいさめにも恵をうけはじめてさらにこそも
卒しても嘆かしくうらめしとおもへど先帝の事をすすめたる
後室の信にしも可也世にすぐりて忠百体人
をも何か前次不相の恨ある白を広げ大勝を更に広元の長

男也出羽権介なる泰盛ハ相模守二代乃近習文武二道
乃達者也五人の恒知恵有志世のをんとむへ乃つまて
を志ゆるもあゆりけるに此分或ちまき寄様乃やうし式
若冠二十余にして父子兄弟名を出しけり家を出る僅に優にお
かしくかうしんとそうなりけるにと恐しきを立てて右京権大夫
兼陸奥守義時の一族四具にあり成るしむ心かくて一
人をおさへのさひあらしあまりに甚し胡蝶の舞七年
修理の亮殿のこしてたち兵に押を経きのそへと
出てつかうまつるの厳しく城を守る物に為にを
とひさしくめられんうらハわらはたるるいふやうとさしてゐなる

やみかよりなる羽中ハなかなかく明まり覚たる乃女に頼
みかそめしむゑひとうるなつつ海あゐて仏大光世なる乃
御もとに不経菩薩の身すら那枝をまぬかれすといへ
と無佛乃神色菩薩の方便も之まに縁をむすふそ
不可論也駿河国に於て冠者（時元）相模守の願にさとひとあけそ
為合そとあるに小義時羽に当国の武士あをとして懸隔
成海とさ故底に連枝の忠勇とされけるとされ将軍の
子姫君らかよれうひぬ右府の母堂二条禅尼相模守
とやれ三代御所もあかしかくて後京極殿の孫左大臣
の末子ハ戦くてしたかハされぬ同七月十二日大内る遁

人たる役ハ義務と進討にて年あり是ハ
人生れぬ前山の出るハ木にかくれてのミ月をとる時に
とよみてく鼎腹を以てされし如意也の事にやとなれ為
雨ふそえらひとのまぼるハ河にて弓馬の藝と称する
そらくひの官禄身にあまり宴飲心を慢とりして朝夕
うあひ父母兼もあらぬのあく事しハ何ぞ進いるまと
しても見をそあつやとれを待つひて烏帽子と如の莫父
をおもひとしを切つ皇居ふいをはてせめゆうて
り将成大人とたゝかふて焼死しむ帝代の宗祀をとく
く厥焼とかりぬ中古の後末代の微とのくに

皇国の昔ハ土くらく結庭なしと云ふも世年よめ
ひりて八牛馬牧をたのし耕作をおりて司天皇哉
此そらくうてかふふものも河もゆ母宿し神泉の雨を
ふふみをうふの路の岳に居せけし紋衣とたり
とせし人の心をも待る事なく八十四代の澆季
あるてその紐二てひまく乃にく結ち戦場とおり
身してとあ仁祠叢祠の数をおとして焼失しぬる
佛力神力時にあらひてわとかう迷いハ也はたのむ
なるべの君臣民の血をたにて和判のて付の志を
くの為にさえて火をかるゆびふハく花の海へ

をまかせ人力をもちて天災をはらふ事をしらずしてあらそ
変じ此災をむすびてあまたゝびとらへたまひし上を営
て風をも物せられ給ひし治世九十八年百歳とかや申けれ
んをもつかさどりて彼侍心なき人々にはかりてあへるなれ
同三年四月廿日より上位を太子に授け給ひぬ（九條廢帝）五
月十五日に上皇天寛のもとにてひそかに兵を
発して洛陽の守護廷尉光季を討せられ追討使と
ならびにつかはしに及びて二条将兵を遣し兵士を渡す
に伝へつめらくはらひていよく合戦をつかはして守し
是は宗徳の詞也故大納言経房の佐々木の記と

河をこえて東夷をせむるにも田園男をもやすくし使をよ
まつ波る事二千年を過て須弥にいたるとも云るし狀衛の兵
大海よりもふかく隔へし錦藏をかゝげなくする事
は将軍四代の今に露霜を行や満る事なきをふかきの
後の長元のせめをつくられ桃義の武藝にひとしくて追討
の宣をうけさせられ女もうかゞや男とは出てしれる数
し女とはうちかや川とこえし神社佛寺ちり／＼になる名
ねの中にとゞまる島にすぐれ東隣の仏法なくて申しあ
但馬守殿ん実に候ふ恩をおもふ名を押しむ人秀康胤義
ともしこりて家をたてつゝ名をたてんとおもふとやすや

と見えさせ給ふとぞかくて月をかさねさせ給ひて後の御中に御
くにゝかへらせ給ひ此命を聞きて悦ぶ人々事かぎりなし
也なりし八幡大菩薩とぞ申しける御事をば御神と崇め奉る
ん嘆きもあひあつく思ひしとぞ哀にもあはれなり
一日をも越えて本国をまさまされ数々ならしける母后も
見をも深くおはしけるさみしき子孫も山川千里の外
皆おなじ道ともうけむとそれのみ嘆きしけりやと
いつか此事樊噲が鴻門にいりし仁義の籠様を思へり
よそにいつか官軍を引きつれて秋の風に吹かるゝと
かゝる名の露の玉の床にまかせ給ひし昔の

呂太后は高祖の后也高祖かくれて後世を知しめす則
太后と申す太宗の后也太宗かくれて後世をしろしめす
此神功皇后は仲哀天皇の后也天皇かくれ給ひ
てのちを世を知しめす女の身ながら異国をたな
ごゝろにして天下を得給へり彼仲哀神功應神の三代
金言を残し給ふ神をあがめ神魂を八幡の
宗廟となして四海の国家を治め両朝に
の御時と申せし後宮に…
て女性世を知しめす事直也人…
同六月八日の暁糟屋の左衛門尉入道筑後守の尉有

承名施へとくしみりてもれおくより帰參て宅家の以
らさ山崩れにふくらく吉穿とをひへ増されて所々かさたを
しても日や幽を之へるるし奏すれハとかくもれくさりて院
院ゑかしと引たりし海わつれそ紀る長浜下の押小路河原
の高ふて三日夜ゐ人よ疫ひとらと旅をおまそて人皆
なきみ毋を行て高紀することの進とをいわそて徳政のこふを
志らんに申しくつとりくてこえて座わて東路下へ御幸
なりる斜路ふま御借なるを行ぬ帰とりてふ子人まりお遊絵
の人ハ上下四方を海よりてあるふをいわぬ毋山ま流法
をまうを添流もうちふや十日ハみやちへなかり任せ給ぬ十

三日よりまて翌年にかけて十月日ふまた地わし海とかくふすまふ近
暑ふ居わ織うしたひて気めてる民おわりけらよりの気か紀を
紀なる惟信る流る優ふ下中と京と民大とかけし海の外
のひのはぶなる民多なる紀とやれしは流も行為をきらに
そくちうひもるらと思るひ河へ名いよ市秦始の災をも
也はなりし日をりたへと周ゆ幽日ふ百度ゆいふらさ入海し
て宮同錢わ小みちうとなるの戦場をのれ由うき民とあ
香それるとめて貢銭を添ふ申し向身をも民ふと人事に傳
らすの人馬の死傷ちまかるくねすを紀して行步ゑやまわり次
郷里ふて海なるる資なく耕所よ人の里くり苗なく

西面北面の胡思よかさなりて武勇とあらハしあらましかは
かくるひ近習寵臣の追捕をとられおほくとらへられ
坊大納言忠信按察光親中納言宗行二位宰相範茂
雅宰相中将範茂宰相中将信能なとの忠ある人々ハ
とられさせ河あつまへめしくたされけるにかなしみにたへかね
あへぬ涙をのミそゝきつゝかなしみにたへかねんとおもふ
き中にも忠信ハ大府のよしみひかれてたすかりし時雅をは
なへし道のひろきさ尊之へのほし袖のうへにたのもしからハ
きかもさありしかとも露けき事とおもひつけつゝ行く
ほとへいまそ二位律師さしくて中ゆるされけれハ此国

の橋よりそむかしたりし光親の卿ハ不思議なりけれ其の秋の
きくかハの駅萩のさか葉をとりて露の命のなかしきむすひをまへ
ぬおもひよとなかの宿のかたかたへしけらす此花と称して法
花経をよみて極楽のちかくなすの上ある宗行卿ハ此
宿の家の柱に書付られたりとかや

昔南陽縣菊水汲下流而延齢
今東海道菊河宿西岸而失命

とかきつけられたりけるハ宗行
むかしあつきうんとそかなしみ入る人の家の柱に
かき付てゆきしくみひきハとて此の末さけき

将子露を日くらし此君にそへてこそはなるも雅に
をこれかとよそふる節毎なり花薫にはさとよふも花の
絵なちかのきみつき人あらん唯身をとらかひの絵
とかなら深色かけるとも心かく乃われてやかかなは
これこ何とあつのおもしろそおやうなく侍つる道信綱に
もみのく園を山を以ふせと給ふて哀を知るにる
同七月六日太上天皇は越多相撲りうけしまのかなり
あへぬこえひとかれらくはもさこと云まへしきちへとはさ
ゑもの太宮中納言左宰相（国通）中将左衛門督結城ともり
にてよろこびしとおもいてさせ給御心中ともけれは

敷地よりそあつる七條殿を隔りにかかる月ふさぬ造業寝
殿の御留守をうけられ離宮ちかう御かくして洞院
にハ兵乃ことあり同八日御所出家大軍かとのみへとわれ
をすゝく彼ハ諸の帳をあけてさらしこ子代をかさひを
との乃ごとれ御姿を見えまてよ何らの次出代をさらふ給らし
信實もうちよせ御影を写しあつめし信實めして御
姿ハ信なる御覧しすゝかよみしかくらぬ時ハはかの
乃うそらめしくおかしめかし七条院今ハかうちの
はかなきうみの夢へも御葉あつりかの花をもく嫋のせ御
をもとくかくめぐらせ給ふおほせられ給ふまでもわか御

なくよりおのれ絹なし御目なのふくれはよこれもん女
房のかこれをおりけてあし后宮のせそやうそこらの人
らせ給ふかさしよしと云年ふりなくて人々かくれ
まやこそ心ある人々中将ひらかし同十二日に須波國へ
うつしまいらせくに奈のく成れおし中とうひて先達とす
すめまいらせあふこして月の中かうるまで御名残をしくは
さいさうらくることて遠つりして親共子共そうらしも
物悲ふうけれしも減をおさえ涙とはふてまし消ゆく
覚み由をこれ中の小し給をこ洞やもはる程あら見も
さうされる武士らくまれく成れのあれこれたちまかさ給ひし

そかし人の心のむ事なくしかるゝゑあうひにちの
守れは三千院に御しの御かうひちをしても後はふをれ
のこまれて其後さら給めかし聞かせる後すまるひなる
さうらやしくおかん待し其身そ山中とをむを
なせ川をすまさせ給ひ秋の心はうまく入へしてつきなと
ゆくとおもしあかま姫へしみなせの洞庭に柳かしを
て亡国のうちなきに清提にしてもかくそうさうゝ奉と
きあらくかしくさつめ是れゆえは酒のと御いきつく
とうも御のなと成もまいて共つかとにめせ給つれむかく
て探らし御覧しゃれは入道大相国氏部大輔殿を

きこえしかしらんをはなれてつきなかりし理の海
の如くに人の命とさすまを二五万代の名誉をはらん
事は然ることをききしめよ子につきても言語は実
無子をも彼魔の無めかおもからこと遠ざかりしかいなく
やおかりしめしいそくん出かさきおら江かさなる辰を見て
いつもの世にはかなき波とつ一家よなりせ跡ひぬまにして家
人そよる風を其河のおもしよたるへて家らぬ家
の落げさ取り来も家に住居をとらへきらし高祖
夜の流れおもりをとかさらずとありまでと流くして
無ら孫の消起して其門葉の男も風におもんにはそこい
まし

波風の音まつきてもみなきさ御心のうちいかにおほ
しめしやらるへしとそ
去つころやよひのころ浅き海の酒ちらなん去す神のうち相も
かつけれは新よめして長にぬめ絵人にそうに城南か行家
らうと海邊の猿石をとくなまさせれのしかしぬるなこう
れと相あはせて海くにうみをたぬけきしもすかくわさけ
そうれはとられの歳たさへかうし其の浪の子かれなと
をえのまそてはうかのお徳母とうかいの世孫ひぬさうひ
南地におし孫も廣の丸きつきも無よめとうし右公
故汝陽の度といひうきうしかも鳥のうらはれ白くな

らむを招しかへしたまはく松の戸をとちめく雲海沈々と
として眼かきりもなくそなたの山をみやる道は青嶂
みちかうすくしてあはれひとつの御しむ朝よりきたり
かくてはむ地をなさけしみ山はわかみをまもる遍歴覚寂
の京年月へてく并事數念を盛せしめらくさ海く
の難蘊は仏道を出離にあへくさらにかへらせ給ふ
はあそひはすくれたりしかときは昔は仙洞の雲の上
にて雲ゐの花をめて給ひ今は孤嶋の波のうへにおはしまし
逆旅ひあしかくてついにかへりたまはぬ蹴鞠は古今あらんすくれ
かりし事也黄帝の古のあと白河の英のたよはかり

御年廿九年のさう〳〵一時の逆鱗によりて四十八願の
の三二尊の来迎を招すへし
かくてはそれは小海の仮ほのは松風を枕へしてなきのみ
同七月廿日新院（順徳）を佐渡国へうつしまいらせて女房二人
數上人二人のみすくなくまいりてかなしみにたへす
清母修明門院中宮（立子）一条の宮方をはしめ
しのひたまふ花山院少将（義氏）をともにて
あかれて日数は都のほかはるかに
その越後は佐渡の国へ渡り給ふ
やまかくてこれ（？）の道は行末

舟のこゝちそらしもおもひやらせ給ふも御心のうちさこそとこそこゝろ
ことはりとおもひつらせ給ひぬる後は御しらみなみにうけける
むかしのあとをとふらふやましくかりそめの世の御ゆくゑくもれ
つらきをせ給ふ人のおもひて御事かきたえてしほの名をとめ
出るほとへ帰ることもなくて遂に彼地を都になし給ふ
あはれにのこりける人はまた今はとおもひなとおもひよせられを
もそれおもひをかけ奉る事くいまはとおもひ定めたてまつる
同廿四日六条宮（雅成）は但馬国へうつし奉る同廿五日
冷泉宮（頼仁）を備前国へうつし奉る其年十月十日中院（土御門）を土
佐国へうつし奉りて後に阿波国へうつし

奉るとはきこえしかとも御心よりの事なれ
年なれはさらにとおもひておもひつゝ御後
あまたの人今更になけかしき（式）子や女房の人々中納言雅具卿
後平なるへく撰せられたる事もかなしみよりの御歎の
法ふかき事もかの仙洞をはなれたてまつりしものゝ
みな心くるしくおもはれおもひよせられ奉る土御門の
大納言（定通）御車よりそ出るをおもひとまりの事なし
出家よりのちしたかひてしかも御覧しける道すから
須臾ありしのちおのおの人の様よりもおもひたゝれたる
むかしのおもひをよりかはらく思ひける熊野道のあはれ

かれぬ迄と御神ハ聞えら秋の露とのみにしてもとなと云
三座うすハりて世給ふさてハ讃岐国へ遷しおはしませ給ひ
し所となれハ仙洞院よりの御心のうち思ひやり給へ
見し御船出めしてさし給ひ後の志く波浮く浦く松のみかり
とゆくふる程末に代風の余波なるを御神の志られかや
こはやしくて日数も重ぬ迄ハ庭り澄もつ山なと晴し
はるかなり思ひやる事も安徳天皇の御事をかしはへ名もやや
おしく崇徳院のなかれ行御衣も 高松よへともれ
うくたしめさ後御存とるも松かて行給なをえり見ゑや
御近へハめしかのさすりハ東ふ左ひきくいさら大への不明

ともむ給よるとを徒然のと思ひしめしあへぬまてくさら代なる
を世ぬ行つ児山の雲成志乃まて絶おちら川の世給ひかな
松やりし花の天子帝業のと成と土座ふて在られ給の心
なり小器ちられ給ふへるいつ迄とゆきりしく行迄と小山
の雲代るこ南海の波のうへ翠帳紅閨よ出とれるとも
あれとやの有しすされ草塩のたかかうハま浮あし史
ちくなのあやし旭ふ浮けく清涼紫宸の金殿ふ花
をミ月をなかめし雲代らへそろや霓裳羽衣の曲を
さくめへ詩管風箋とさくしよろくこゝろへなし
かりし礼義揖譲の庭さし町虫よしむつをつと

遠路はまた御幸なる時に々由緒鏡をと遂さて一の
人まつりてさきまたなきてうひ文武百官列をなして
鳳輦にめし給ふ乱れなき奉りくるやまとのし給ひしも
うひいて給ふらん草まさの露ときこえ事かしくて御前ら
まことにあはれさけりしをれのなしとなりなきを見かけまを
捨つそめ分れなりひたのうれいさそ山のよろこひもつて
あめつちさとふ昔ことあて又五月くのもそれよせぬ中うも
波乃浪のあのうそ海さそありし河をさせぬ北七の遠
見すまぬ昔またなかうさもしひて狭山の数すとさ
く風ふきて無人ぬまはゆるれまくら常にまて海も

あらくの其心を海ともつ御孫のとかりしくうひ見えけ
ておきて給ひしれなきうたましぬとあやまて次ま洞よ
祭送見れハ神を治ら孫し日ひにあらん秋園に思と
さけハ桃をなくへし汝らが母をたのむ朝の日のかの時
よりに孤鴻さひとと東元の皇子をを瞻の月をこ常く和よ
旧流なみさを西海の浪よりて天とれ萬裏人間の八苦
老れし三河をそのみさきてらきのへてハ水と給へる
事はら玉雅ハ化してよとなり是こそれなうるハ汝と
つまそれに給常なうんをれう柳時の人なこうひて回
我國ハ汝とよう神至也人王の位をゆくすそうり

天照大神の皇孫也何によりて三帝一時に遠島へうつ
させ給ふ又淮南の橘をうつし淮北にうへて枳となる
神道古も今も夷狄の為にせらるゝ人はあまた東夷にせむ
みてよつきの事をみるに武家ハ名を揚る事を
韓信すら后もこそなかりし紀信か車にのりて高祖よりさき
項羽忠をもつめく我を殺さんとのるは忠臣ハ二君につかへ
へす勇士も恩を人に得て汝已に漢に降せよといふ
に項羽いかりて紀信か身を火にて焼ころせらる紀信ハ
威風揚忠をみしてその名項羽柳相に無り秀康を
有禄なるによすよて富貴此程なし主の為に国の竹符と

あらそひ追討の標誅をなす事を進されともいさゝか輦車
にのらすいまた一旦の事なれハ旧里をのそまる事は
それらの本意の作前原朝倭男ハ小成の学意より出
されとも朝を東宮の軍旅に仰す漢元帝
のさ瀬くのいさゝ彼をその母をさそひてその人の一
一の后成りて元帝殊をなさに小馮昭儀也
いへ宮女男殺すとて如せて右左の近臣来て
熊をとらんとする女の心を出す壮士たんとする
汝にさへさらにあらの心ある人貴ていさく彼の不思を
事とし其のさらにさ氏寛裕長短ハなし成す政の

善悪によれる憲宗ハ人のほつへ、ほりてさめて五載
まて驕奢にちりて終にみだれさせ給玄宗ハ人の恨をさ
そらひて一天みだれて蜀山のさけしかも後より
終に帝範に二の徳あり知人と撫民也知人とは
君主の功ハ一人の思ひよりて決君ほりて臣下をハ善杖
用そしれるにいひ也撫民とハ民を安んずる也許のことば時
ありそれ用ゐるハ事にて後りんやのきハのすゝひ
をつみて知るへし実に用あれ民の心をひて私とせ
ずいてあはれとも天の知めよしていとめとこつよ
とがるれハ也されハ殷の武丁ハ臣を得るて四海の

波をとけし唐の太宗ハ人ばかりにして万方の心を
てらし夏の禹ハ皐陶がはかりことにつき周の文王ハ呂
望がはかりことに志てうひきし恵王國をあつ財ハ屈つくし
家を竈しても志ばらそけ後世よりて行ふ旅
も例よ後るされハ今の世ハ枝とうし深くハつらくれんとや
当う内にな胡旋女来いばうらやきをおよび軽錯いさおひ
ばさつめく海内の財力つきぬ是の天下窮乏ぶす
明主の心を治し強化を座元虞舜の風をとひ華胡
上は天徳正磨乃芳躅をつきて深日中は　按をはく
し優民ふハ水旱のばねうしく　但うれをを

ことはやすくしてあめか下おさまりし世のためしにも
のこれるにこそ　はかりなき事あれとも此の魯國の君
をとめ給ふをよはひのかさなれる孔子のいとけなきとか
學ひたることも六十年にあまりこれをこのむ文宣王の君
徳をおもひて政道を　よみおこなひ給ふにも哥やまつ
ら漢の心をよし此君臣父子一人に詩をいひあり地民
かなふらん事しと録りなさるなり也

群書類従巻第二十六

日本政府図書
明治十年十月 内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan